

5-4

演題	訓練が奏功し胃瘻から常食へ移行した一例
副題	～レビー小体型認知症を考慮した摂食嚥下評価～

法人名	社会福祉法人 若竹大寿会
施設名	介護老人福祉施設わかたけ南

発表者名 (職種)	長澤 匠 その他
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	横浜市南区 山谷 115-5
TEL	045-315-4155
FAX	045-315-4775
メールアドレス	nagasawa_takumi@wakatake.or.jp
URL	

今回の発表施設 またはサービスの 概要	横浜市南区に 2020 年に開所した特別養護老人ホームです。 定員は 160 名（うち、併設ショートステイ 10 名）。 「職員は一丸となって人を幸せにします」の法人使命のもと、自分自身が利用したいサービスの 実現に努めています。
---------------------------	--

研究の目的、PR ポイント

薬剤調整により機能訓練が可能となり、胃瘻から常食・常菜へ段階的移行したレビー小体型認知症の一例について発表する。

取り組んだ課題

ご利用者様：80 代女性、要介護 5
現病歴：レビー小体型認知症、てんかん
経過：A 病院にて胃瘻造設され、その後当施設へ入所。
ご本人様・ご家族様から経口摂取の希望有り。
大学病院歯科医師により摂食嚥下評価を実施するも、誤嚥があり現状では経口摂取困難。機能訓練を実施するも認知機能や覚醒状態の変動により、安定的・積極的に機能訓練を実施し口腔嚥下機能を向上させることが困難であった。

具体的な取り組み

- 摂食嚥下評価
口唇閉鎖不全や舌可動域不全など口腔機能低下が顕著。嚥下機能は比較的保たれている。
- 薬剤調整
認知機能や覚醒レベルの変動有り。日内変動の観察を行い、医師により薬剤を調整。
- 機能訓練
頸部や肩の関節可動域訓練、口腔器官運動、口腔ケア、アイスマッサージ、呼吸機能訓練、嚥下体操等を行い口腔嚥下機能向上に努めた。
- 食事摂取への配慮
経口摂取開始後は、姿勢調整を行い全介助で食事摂取。徐々に一部介助から自力摂取へ移行し、食具の調整も行った。

活動の成果と評価

- ・ 薬剤調整により認知機能や覚醒状態が安定したことで機能訓練が可能となり口腔嚥下機能が向上した。
- ・ 約 1 年 6 ヶ月の訓練期間により、食事形態をミキサー食から常食・常菜へ段階的に食上げに成功した。
- ・ 定期的に頸部聴診法を行い嚥下状態を確認。多職

種で日々の嚥下状態を共有し誤嚥性肺炎発症予防に努めた。

- ・ 経口摂取開始から現在に至るまで誤嚥性肺炎発症なし。

今後の課題

レビー小体型認知症は、他の認知症に比べ咳反射低下による不顕性誤嚥リスクが高く、食上げに慎重さを要する。
多職種と共に多くの事例を持ち、アプローチ方法を確立していく必要があると感じる。

参考資料など

聖隷嚥下チーム 「嚥下障害ポケットマニュアル」